上毛産業組合史

復刊版

上毛産業組合史

群馬地域文化振興会

新編中華書局

序

歴史か今後の指針を得る爲必要なのみならず、後進を感激せしめ發奮せしむる上に絶大の効果あることは何人も疑はぬ所である

古來歴史か大事の動因となつた實例は尠くないのみならず、本縣産業組合の發達は最古く、大に省察を要する秋に際會してゐる、又本縣の産業組合は特別の事績を有し、此等は何れも先人が多大の犠牲を拂はれたる結果であつて、洵に稀なる尊い史實と言はねばならぬのである、本會は昨秋行はれた御大典を記念する爲謹て本書を茲に編纂し、聊か産業組合教育の資料と爲さむとするものである

昭和四年三月

産業組合中央會群馬支會

筆者序

筆者が初めて日本産業組合史の編纂を思立つたのは、大正三年初夏の頃當時相州逗子櫻山の鳴鶴山莊に起臥して居られた、日本産業組合の東の開山伯爵平田東助氏を訪ね伯か遠く明治の初年外遊中、産業組合奨励の必要を感せられ歸來自ら陣頭に立つて、其の運動を試みられた當時の経緯及苦心談を聽き、伯か如何に帝國の前途を思はれたかを知り、其の誠忠に感激したときであつた

筆者は其の後間もなく、伯か最初に其の運動を試みられた試験場とも言ふべき、静岡縣に奉職する機會を得たので、自ら日本産業組合史資料の蒐集に着手すると共に、伯及産業組合中央會當務者に進言したのであつたか、終に中央會は大正九年頃より其の編纂に着手し、大正十五年一先上梓する運となり、續いて各府縣に於ても漸次其の必要を認め、夫々府縣産業組合史の編纂が行はれた

筆者は偶々昨春以來本縣に奉職し、本會か御大典記念事業として本書の編纂を企つるや、主として其の任に當る機會を得たことは、筆者の最光榮とし且頗る會心に堪へない所であつた

本書は公務の傍ら暇を偷むて、極めて短時日の間に編纂を終つたので、甚た不體裁な所や、盡さざる所か尠くないのみならず、幾多漏れたる所もあるべく、殊に事實と相違せる點なきやを恐るるのである、併して筆者の最遺憾とする所は深く文化史的説述に及ぶを得なかつたことであるか、或は此の點は筆者の獨斷より却て讀者の自由の見方に任せた方か安全かも知れない、又史實の蒐集に就ても年代の遠近に依り、精粗あるは蒐集上の便否より已むを得ない所であつた、仍て本書は單に本縣産業組合史研究の緒口を得るを以て満足せねはならぬので、其の完成は大方の叱正と今後の研究に俟たねはならぬと思ふか、之を以て聊か過去五十餘年に亘る本縣産業組合運動か、日本産業組合史の上に如何なる地位を占むるやを明かにしたつもりである

昭和四年三月

馬 場 光 三

上毛産業組合史目次

第一編 一般の状勢観

第一章 資本主義思想感應當時より産業組合法成立

當時まで……………一

第一節 生絲貿易の發達と資本主義思想感應……………一

第二節 確氷社の設立……………六

第三節 交水社の獨立……………一七

第四節 甘樂社の設立……………一八

第五節 購買組合の濫觴……………一九

第六節 下仁田社の獨立……………二〇

第七節 南三社課税問題と産業組合法の成立……………二一

第二章 産業組合法成立當時より同法第二次改正

當時まで……………二四

第一節	近代的産業組合の濫觴	二四
第二節	産業組合中央會群馬支會の設立	二七
第三節	南三社の産業組合法改正運動	二八
第四節	指導員設置及監督規程制定	二九
第五節	交水社の改造	三〇
第六節	産業組合法第二次改正と南三社の改造	三一
第三章	南三社改造當時より世界戦争當時まで	四九
第一節	不良組合の整理開始	四九
第二節	機械製絲業勃興	五一
第三節	信用組合聯合會の設立	五三
第四節	南三社刷新問題生起	六一
第四章	世界戦争直後より現時まで	七四
第一節	購買組合聯合會運動	七四
第二節	住宅組合の普及	七五
第三節	關東地方震火災の影響	七九

第二編 郡市の状勢觀

第四章	木瀬村部落組合の合併	八四
第五節	商工業地信用組合の勃興	八九
第六節	搾乳販賣組合の發達	九五
第七節	南三社刷新問題停頓	九八
第八節	東毛乾繭倉庫の設立	一〇二
第九節	養蠶家救濟建議書と群馬社の設立	一〇八
第十節	組織的指導の實行	一一三
第十一節	副業組織の改造	一二一
第十二節	南三社刷新問題好轉	一二四
第一章	勢多郡	一七〇
第二章	群馬郡	一七八
第三章	多野郡	一八四
第四章	北甘樂郡	一八九

第五章 碓氷郡……………一九七

第六章 吾妻郡……………二〇九

第七章 利根郡……………二一四

第八章 佐波郡……………二一九

第九章 新田郡……………二二五

第十章 山田郡……………二三一

第十一章 邑樂郡……………二三八

第十二章 前橋市……………二四四

第十三章 高崎市……………二四七

第十四章 桐生市……………二五〇

第三編 農業倉庫業の變遷

第一章 發達の大勢……………二五五

第二章 督勵施設の變遷……………二五七

第三章 事業成績の變遷……………二五九

第四編 系統團體の變遷

第一章 産業組合中央會群馬支會……………二六七

第二章 保證責任群馬縣信用組合聯合會……………三〇〇

第三章 有限責任信用販賣組合聯合會碓氷社……………三二一

第四章 有限責任信用販賣組合聯合會甘樂社……………三五三

第五章 有防責任信用販賣購買利用組合聯合會

下仁田社……………三七九

第六章 有限責任群馬縣購買組合聯合會……………三九六

第七章 有限責任呂樂郡購買組合聯合會……………四〇〇

第八章 有限責任勢多郡購買組合聯合會……………四〇一

第九章 有限責任佐波郡購買組合聯合會……………四〇一

第十章 有限責任山田桐生郡市購買販賣組合聯合會……………四〇二

第十一章 有限責任群馬縣牛乳販賣購買利用組合

聯合會……………四〇二

第十二章 有限責任群馬縣蒟蒻販賣組合聯合會……………四〇四

第五編 施設制度の變遷

第一章 施設制度……………四〇五

第二章 督勵費……………四〇七

第六編 統計

第一組 合數……………四一〇

第二組 組合員數及出資金額……………四二四

第三組 資金累年比較……………四三四

第四組 各種組合事業累年比較 附剩餘金……………四三八

第五組 總括狀況累年比較……………四四八

附 録

第 一	設立當時の確水社定款	六三三
第 二	最初の産業組合法案	六五四
第 三	最初の産業組合法施行細則	六六四
第 四	産業組合法施行細則	六六五
第 五	最初の産業組合取扱心得	六七二
第 六	郡市別状況	四五三
第 七	販賣高累年比較	四五六
第 八	賣却高累年比較	四五八
第 九	利用料累年比較	四六〇
第 十	各種地方資金累年供給額	四六三
第 十一	設立年度別解散組合數	四六七
第 十二	解散年度別解散組合數	四六八
第 十三	各解散組合解散状況	四六九
第 十四	各組合及聯合會事業一覽	四九二
第 十五	各製絲組合事業一覽	六〇一
第 十六	各農業倉庫業者事業一覽	六二二

第六	産業組合及産業組合聯合會取扱心得	六七二
第七	最初の農業倉庫業法施行細則	六七六
第八	農業倉庫業法施行細則	六七七
第九	最初の農業倉庫獎勵規程	六七七
第十	農業倉庫獎勵規程	六七九
第十一	設立當時の産業組合中央會群馬支會會則	六八一
第十二	産業組合中央會群馬支會會則	六八五
第十三	産業組合中央會群馬支會表彰規程	六八一
第十四	産業組合中央會群馬支會財務取扱規程	六九一
第十五	産業組合中央會群馬支會基本金蓄積規程	六九三
第十六	産業組合中央會群馬支會役員實費支給規則	六九四
第十七	産業組合中央會群馬支會旅費支給規程	六九四
第十八	産業組合中央會群馬支會退隱料支給規程	六九六
第十九	表彰産業組合一覽	六九七
第二十	産業組合功勞者一覽	七〇〇
第二十一	表彰勤績産業組合職員一覽	七〇三
第二十二	産業組合關係官吏異動表	七一〇
第二十三	産業組合中央會群馬支會役職員及代表者異動表	七二三

上毛産業組合史

第一編 一般の狀勢觀

第一章 資本主義思想感應當時より

産業組合法成立當時まで

第一節 生糸貿易の發達と

資本主義思想感應

群馬縣に於ける産業組合運動は、遠く明治初年吾か國産業組合制度の東の開山たる、平田東助氏第一回外遊當時より、既に幾多の先覺者に依て初められた

本縣は正徳二年十一月世界最初の養蠶書と言はるる、蠶養育手鑑を著述した群馬郡明治村大字北下

の馬場重久氏を初め、氏に私淑し清温育を考案し高山社を設立した、多野郡美九里村大字高山の高山長五郎氏を出し、又明治三年政府が、初めて北甘楽郡富岡町に模範機械製絲所の建設に着手した程、製絲業は久しき以前より、主要なる生業として各地に盛に營まれてゐた

安政六年米國人ペルリの來航に因り吾か國と米國との通商開始せられ、同國の機業が吾か國の生絲を需要するに至り、生絲の輸出は漸次増加したか漸く奸商等現れ詐欺濫造の弊を生し、信用を失墜するに至つたので識者はいたく痛心し、政府は明治六年一月生絲取締規則を制定し大に之か防止に努めた

米國に於ては早くより産業革命の結果の資本主義經濟發達し、機業の如きも大規模の分業組織と、精巧なる機械の應用に依り營まれてゐた爲、其の需要する生絲も品質整一且優良にして大量なるを要件としたので、輸出業者は機械製絲の効能と、製品の検査、荷造、販賣の共同の利益なるを説き、頻りに之を當業者に勧むる所があつたか、偶々勢多郡黒保根村大字水沼の星野長太郎氏は此等の狀勢を看取し、明治九年實弟新井領一郎氏を遠く米國に派遣し、同國の市況を調査せしめ大に製絲の機械化と、輸出と検査、荷造、販賣の共同を勧めたるか、明治十年八月終に舊前橋藩士に依て座繰製絲の改良と士族授産を目的とする、前橋精絲會舎の設立されたのを嚆矢とし、各地に製絲共同の普及を見るに至つたか、爾來製絲共同の機運は著しく勃興するに至つた、同會舎の組織は別項約定書に依て知ることか出来る通、社團の本質を有し聯合會の型を備へ、座繰生絲の揚返、検査、荷造、販賣を主なる事業とし、信用組合以外の吾か國各種産業組合及産業組合聯合會の先驅を成したので、後節に述ぶ

る確水社は本會舎に倣ひ、又交水社は後本會舎より分離派生したものである

座繰製絲改正申合約定書

當上毛生絲ハ天賦ノ良品ニ有之處閉港以來追々奸商競ヒ起リ製造人ヲ愚弄シ製造人モ亦眼前ノ浮利ニ迷ヒ終ニ製造粗惡ニ至リ國産ノ名譽ヲ穢シ其ノ弊害百論ノ厚キモ一洗ノ効ヲ奏セス吾輩積年焦心長歎息ノ際勢多郡水沼村ニ星野氏アリ機械製絲ヲ以テ米洲ニ聲價ヲ得タリ尙ホ座繰製絲ヲ精選シ試験ノ爲メ更ニ同洲紐育府へ遞送セリ同府商賈共眞實良品ナルヲ感覺シ高價ニ購得シ引續キ輸送ヲ懇望セリ星野氏同郷ノ有志ヲ募リ結社協刀彌々増々輸送セントス實ニ天然ノ國産タル生絲ノ弊害ヲ挽回シ奸商ヲ矯正スルノ秋國家人民ノ幸福ト謂フヘキナリ吾輩固ヨリ希望スル處即時同志ト謀リ結約スル者日々倍セリ則一組四十名トシ幾層精品ヲ製出シ其ノ申合ヲ確守シ共々鴻利ヲ計リ漸々國産ノ名譽ヲ顯ハシ終ニ粗製濫造ノ弊害ヲ革メ且ツハ吾輩士族永世家産ノ目的ヲ立ツルノ基礎タラントヲ欲シ一同連印其ノ誓約ヲ作スト云爾

座繰生絲改正精絲會舎

第一則 當地方座繰製絲ヲ改正セン爲有志協同精絲會舎ヲ設起シ一組四十名トス其精撰法タル細太ノムラナク節ナク一様ノ絲ヲ製出セムヲ要ス依テ一組中世話方三名或ハ四五名其組ノ適宜ヲ以テ精撰シ都テ此ノ世話方ノ指揮ヲ受テ眞實ノ精良品ヲ精出スヘシ但シ世話方人選ハ公法投票タルヘシ且世話方中頭取一名ヲ立絲方副方ハ世話方ト申合タルヘシ頭取ハ其組々ノ適宜ニ副員スルモ妨ナシ

第二則 同一ノ精製品ヲ製出シ其損益得失ヲ共ニスルヲ主トスルノ業務ナレハ目的トスル申合ノ斤數ニ應シタル元金諸費共テ各家出金シ世話方是レヲ預リ時ノ相場ニ依テ上繭ヲ買入各製造家ニ分賦シ原價ニ應シタル計量ヲ繭方判然ト定メ各家受取人ノ通帳ト繭渡帳ニ割印シ相渡スヘシ但シ買入レタル繭ハ世話方ニテ相當ノ賃ヲ出シ第五則ノ手續ニテ屑繭ヲエリヌキ各種ノ繭有トキハ見計ヲ以テ切交相渡シ其撰買ハ繭買入帳ノ原價ニ結入ルヘシ依テ買入方ニ於テハ尤上等ニテ屑一割ヨリ多カラス繭買入ル事尤深切ニ注意ス